

第 10 回一関市総合教育会議 会議録

- 1 会 議 名 第 10 回一関市総合教育会議
- 2 開催日時 令和元年 11 月 19 日（火） 午前 10 時 00 分から午前 11 時 30 分まで
- 3 開催場所 東山市民センター 大会議室
- 4 出席者
 - (1) 構成員
勝部修市長、小菅正晴教育長、千葉和夫教育委員、佐藤一伯教育委員、
伊藤一志教育委員、桂島加奈子教育委員、
 - (2) 事務局等
市長公室長、市長公室次長兼政策企画課長、政策企画課主事
教育部長、一関図書館長、教育部次長兼学校教育課長、教育部次長兼文化財課長兼骨寺
荘園室長、一関市博物館次長、教育総務課長補佐兼庶務係長、教育研究所長補佐
- 5 議 題
不登校者数の増加について
- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 報道 4 社
- 8 挨拶
市長挨拶

秋も深まり、今月は特に市内各地でいろいろなイベントがあります。今週末で、峠を越えるかというところです。一関市総合教育会議は、平成 27 年の 4 月に法律改正があり、27 年度から一関市の総合教育会議がスタートしました。総合教育会議ができたのは、滋賀県の大津でいじめによる自殺者がでてしまったという大変深刻な事態に陥った時に、市長部局が学校現場とうまく連携が取れなかったという大きな教訓を残したことが発端となりました。一関市全体として、常に関心をもって、連携して地域の力で子ども達を育んでいかなければならないと考えています。その時の教育の現場が抱えている問題等をしっかり把握して、地域として子ども達を健やかに育むことに結び付けていきたいと思っています。忌憚のないご意見をよろしくお願いします。

懇談 不登校者数の増加について（進行：教育長）

学校教育課長：資料No.1 により説明。

教育長 資料により、全体像をお話していただきました。いろいろな角度からのお話だったと思います。不登校者の現状は、市内の小学校は、156 人に 1 人の割合で出ています。中学校は 30 人に 1 人の割合ですので、中学校についていえば、1 クラスに 1 人ずついるようなイメージを持っていただきたいと思います。市のみならず、県、全国の増加傾向ですので、背景に非常に深い部分があると思います。学校教育課長から全体像の話がありましたが、話を受けての感想を一人ひとりお話ししてください。

千葉委員 欠席日数の状況で 40 日程度、週 1 回程度休んだ生徒を不登校にみなすのは、

トータルとすれば 40 日になるから不登校かもしれませんが、週 1 日休んだ生徒、残りの 4 日来ている生徒が不登校なのかと感じました。カウントの取り方でいえば、登校日の 30 日の内、15 日以上病気以外で休んだ人を不登校とした方がわかりやすいと感じました。一度不登校になってしまうと、回復するのが厳しく、大部分が回復しないならば、新規の不登校を未然に防止することが、不登校対策としては最善の方法だと感じました。

桂島委員

児童生徒が、保健室や相談室で過ごすことを別室登校としていますが、一つの学校に複数人いる場合は、学校でどのように対応されているのですか。また、不登校のきっかけ・原因に、教職員との関係をめぐる問題には、具体的にどんな問題があって、不登校になるまで発展したのでしょうか。不安など情緒的混乱、無気力がありますが、子どもが何らかの理由で、学校を休みたいとなった時に、大抵の親は、休ませないと思います。そして、親も情緒的に不安になると思います。子どもは親の気持ちを敏感に察するので、子どもも更に情緒的に不安になり、負のスパイラルのようになっていくと思います。学校の先生方の取組として、子どもだけの面接の他にも親にもお会いしてと思っていますが、親の不安などに関してどんな取組をされているのかというのを知りたいと思いました。また、先生方も自分のクラスにそのような子どもがいて、不安を抱えるのではないかと思います。その担任の先生方に対して、学校の方もどのように取り組んでいるのかと感じました。

学校教育課長

別室登校で複数人いる場合は、相談室等を区切って使うことがあります。また、同じ部屋で机を並べて勉強したりする状況があります。また、市内の学校では、空間を区切ると、気持ちが安らぐ子もいるので、パーテーションなどで区切って、勉強している子もいて、それがよかったという事例もあります。いろいろ工夫をしながら実施している状況です。もう 1 つの質問ですが、先生たちの原因では、担任からの指導・声がけに対して誤解があったというのが報告されております。その誤解を解いても様々な理由で、欠席が続くというのがありました。きっかけの解釈が難しく、2 月に集計したのですが、6 月に改めて子どもに聞くと、この教職員との関係を巡る問題は解消に向かっています。

伊藤委員

不登校になる原因が列記してありますが、私はもっと深い感じがしました。例えば、無気力不安などの情緒混乱は、無気力になるまでの経緯や原因、不安など情緒的混乱に至る原因をもう少し深く掘り下げないといけないと思います。毎年この数字と項目が変わらず、人数も大きいです。学校で様々な対策をしていますが、なかなか改善に至らないというのが現状だと思います。本日を迎えるにあたり学校訪問して校長先生にお話を伺うと、スマホなどの存在に依存してしまい無気力と学力低下に繋がっているということでした。学力不振だけではなく、優柔不断で判断力が乏しいという子どもが不登校傾向に陥るということです。また、人間関係を上手く構築できないということもありました。困窮している家庭、母子家庭などの子どもはマナーが身についてなくて、落ち着きがない子が多く、判断力が乏しくて優柔不断で精神的に不安定だそうで

す。考えられるのは、親が本気で子育てに向き合わず、何事も自己中心的で、子どもに手を掛けないネグレクトによる愛着障がいになっている子どもがいます。中には、強い口調で、親のわがままの犠牲といっても過言ではないという方もいらっしゃいました。教職員との関係を巡る問題というのは、深刻な問題ですが、教師は児童生徒の模範になるべきだと思います。そうでなければ真に児童生徒や保護者とのコミュニケーションは図れないだろうということでした。

佐藤委員

平成 28 年から 30 年にかけての数字が全国的に小学校・中学校問わず、増加傾向にあるということが深刻な問題だと思います。今日のテーマが不登校になるという話をお聞きして、図書館で関係する本を一冊読みました。不登校になる原因は様々であり、それぞれの悩みをもって不登校になっているということと、その解決には、家庭教育が課題になるということが書いてありました。資料の中の不登校の解消に向けた取り組みで、未然防止、早期発見・早期対応が肝心だと書いてあり、そのとおりだと思います。先週、千厩中学校の総合訪問に伺った際も、校長先生の話の中で、いじめへの対応というお話でしたが、とにかく早期発見・早期対応に尽きるというお話がありました。対策としてはそこが大事になってくると感じました。

市 長

資料の一番重要な部分は、左下の不登校のきっかけ・原因の表です。表の項目がありますが、これはどなたが、区分をしているのですか。

教育長

教育研究所です。

市 長

数字は、多いところは多いとしか受け止めていません。一人の子どもが不登校になっていくきっかけは、様々な要因が複雑に絡みあっていると思います。それを区分けするのは、難しい作業だと思います。ここの捉え方次第で対応策も変わっていくと思います。子ども達がやがて大きくなり、社会人としての第一歩を踏み出すまでに、どの様に子どもと接して、子どもの背中を押すことができるのかが重要なポイントになると思います。一関市内に就職した若者が就職して半年経った段階で、「社会人基礎力」というセミナーを開いています。講演より、お互いにコミュニケーションをとることを 5 年くらいやっています。そこでコミュニケーションを会話の技術だと思っていることがわかりました。コミュニケーションは、いろいろな要素の集合体です。不登校になった子ども達が社会人になるまでの間、学校だけではなく、地域の力で何とかしないといけないと思います。地域力というものがどういう役割をになっていくのかというのが大きなポイントになります。こういうところを地域の中でどうしたらよいか真剣に話し合うことから始めないといけないと思います。不登校になったきっかけ等の各項目を見ていると、子ども達の胸の中にはかなり複雑な思いがあってこのようになっていると思います。子ども達の心の内をどのように理解してあげればいいのか現場の先生たちは大変だと思います。

教育長

今の子どもを巡る環境が変わっているというご指摘がありました。自身が育った頃と比べて、あるいは 10 年位を比べて、子ども達の様子が変化していると感じているという部分がありましたら、お話していただきたいと思います。

伊藤委員　　私たちが小さい頃は、親の養育力・教育力、あるいは保護者が子育てに向き合うということを真剣に考えていたと思います。ある動物園の園長からお話を聞いたのですが、動物は将来に自分の子孫を残すために子どもをもうけたら、独立するまで一生懸命子育てするのが動物の世界なのに、果たして人間はどうでしょう。現在のことを痛切に風刺しているのだと思います。今の状況の根底にそういうことがあると思います。そういう環境の中で育った子ども達が無気力になったり情緒不安定になったり、親の愛情を感じていないと思います。

桂島委員　　私たちが子どもの頃は、自分の親が休まないで仕事に真剣に向き合う姿を見て、何事も真剣にやらないといけないと思いました。今の教育では、叱らず、褒めて伸ばす、個人を尊重する流れになっていますが、私たちは叱られるのが当たり前でした。叱らないことが、子ども達をわがままにさせることとは違うと思います。褒めることは大事だと思いますが、子どもの言うことをとにかく聞くこととして、間違っただけで解釈している場面もあると思います。去年小学校で私の子どもが、学校で友達から毎日嫌がらせをされてるということを本人から相談され、そこで本人が学校を休みたいと言ってきました。経験上、仕事でも休むと行きたくなくなります。私は、毎日子どもの相談を受け、アドバイスをして、学校を休ませないで行かせました。そこには、学校とか保護者の方の働きかけがありました。また、スポーツ少年団との関わりを持って、自分でも強くなれるんだと自覚してから、学校に行きたくないとなくなりました。去年、本人の思うように、学校に行かなくていいよと言っていたら、不登校の数字の1人に入ってたんだと思いました。個人を尊重するということが、子どもの嫌なことをしなくていいとするのではなく、なぜそれが必要なのか、保護者も強い心をもって対応して欲しいと思いました。

教育長　　続きまして、新しく不登校になることを防ぐにはどうしたらいいかということをお話していきたいと思います。

千葉委員　　不登校に向けた取組がありますが、スローガンとしてみると、自己存在感や充実感を感じられる場所づくりは、具体的にどんな場を作るのか、その場所を作りあげる力量が教育界にあるのかがわかりません。どう不登校の減少に結び付けていくのでしょうか。果たして先生たちが考える時間があるのか、長時間労働に追われている先生方が個々に応じた指導を企画できるか、先の長い話になると思います。

佐藤委員　　先生方の仕事も多様化している中で、先生方だけで未然防止や早期対応するのは大変だと思います。地域として、どのような役割を担っていくのかということを考えていく必要があると思います。関係機関との連携ということで、学校区や福祉、医療機関との連携も大事な取組として紹介されています。文部科学省のホームページを見ると、家庭教育支援チーム制度があるそうです。すべての親が安心して子育てや家庭教育ができる地域づくりに取り組む中で、地域の子育て経験者や民生委員・児童委員など身近な人による、家庭教育支援チームを組織して、孤立しがちな保護者や仕事で忙しい保護者など、地域とのコミュニケーションや学習機会等を得ることができない保護者や家庭に対する手法の開発を行うとい

う取組があります。地域連携の取組をしています。今後の教育行政の中で、国の取組を参考にしてもいいと思います。

教育長　市長はコミュニケーション力について、キャリア教育との関連で話されていますが、子ども達へこういう形でコミュニケーション能力をつけていく必要があるのではないかとすることがありましたら、お願いします。

市　長　なぜ市長がコミュニケーションのことを話しているかというと、市長になる前に県庁にいた時に、総合雇用対策局にいて、特にフリーター・ニート対策ということで、若年層に絞って雇用対策をしました。コミュニケーションが一番大事だということで、今も頼まれるとコミュニケーションの話をします。言葉は話さなくても最低限のコミュニケーションがとれます。人間には足も手も耳も目もふたつありますが、口は一つしかないので、話すのは最後でいい、あるいは半分でいいと話します。その代り自分の足で歩いて、何が起きているが見にあって、触ってみましょう。自分の足で自ら動いていき、現場と向き合うという現場主義は大事です。行くだけでもコミュニケーションがとれるという話を若者たちに20年くらい話しています。自分の耳で相手の話を聞き、心から納得して頷けば、それで相手とコミュニケーションが取れるということを社会人に話しています。ニートの人は就職活動をしないうし、学びませんが、それを放っておくと引きこもりになってしまいます。そこで、東京大学の希望学という新しい学問領域を編み出した源田さんは、彼らの特色は、動かないことなので、動かせばいいということでした。NPOの協力をもらってニートの運動会をやってみるとNPOに来ていた人以外にも集まりました。源田さんはそこから活動を全国に広めていきました。これが私のヒントになり、盛岡に年に2回来てもらいました。盛岡の元気村という山奥にリンゴ農園があり、そこに5月に来て摘果作業をしてもらい、1週間生活するうちに、夜型の生活から昼型の生活に変わります。東京に帰ると、「次は、いつ行くんですか。」と担当者に聞いてくる人が何人もいました。秋にリンゴの収穫に来て、自分が摘果したリンゴの木からリンゴを収穫して、そのうちのいくつかをお土産に持って帰ります。賃金も農場から払われますので、働いて対価を得るという経験を初めてします。これを不登校の問題にどこまでマッチングできるかはわかりませんが、壁にぶつかって対策を悩んでいるところにちょっとしたヒントをもらってやることもいいのかと思います。

教育長　今日は、教育研究所の方にお越しいただいて情報提供していただきます。教育研究所では不登校の子どもを一週間に2回ほど集めて、勉強したり実習をしています。また、実際に学校を訪問して不登校の状況を聞き取っています。身近に活動していただいている先生から情報提供していただきます。

教育研究所から情報提供

教育長　子どもの生き生きした姿を情報提供いただきました。今日は、不登校状況について理解を深めるということの主眼として進めてきました。説明が多かったと思いますが、皆様方から未然防止や家庭教育、コミュニケーション力を鍛えること

の大切さなど、様々なヒントをいただきました。今後の教育行政の中でも、今回話のあったことを参考にしたいと思います。

市 長 なかなかまとめられないのが正直なところですが、深い問題だと思います。できれば、これで終わらせずに、今後も機会を見つけて継続して協議した方がいいと思います。委員の皆様の意見をお聞きしながら次回以降どうするか決めてほしいと思います。

教育長 非常に大きなテーマでしたので、共通理解しながら皆さんから意見をいただきました。ありがとうございました。

9 担当課

市長公室政策企画課